

揖保川流域委員会現地視察時の説明

直轄上流端・引原川合流点

(バス車内での説明：伊和神社～安積端付近)

庄委員 左手の森が播磨一宮伊和神社です。伊和族の本拠といわれておりますところです。一宮町の名前はここから取られております。

ここが染河内川です。ここで揖保川と合流しております。合流点から下流はずっと堤防が完備されています。けれども、それより上流はまだ堤防が無堤という状態です。

資料 8 ページの写真が安積橋ですが、次の信号のあるところです。洪水時の安積橋の様子と、下の写真は、安積橋の少し下流のほうをとらえた写真です。安積橋から信号を山崎八鹿線という県道に入ります。左手が写真の場所です。

7 ページの写真がこの左手です。今でも写真のとおりです。これは平成 2 年の台風 19 号の時の災害の写真ですが、左手の民家の庭先まで水に浸かりました。竹やぶがありますので、それでかろうじて水を防いだという状態でした。

(バスから降車して説明：引原川合流点付近)

河川管理者 国土交通省姫路工事事務所的那須でございます。今日はどうぞよろしくお願いたします。今見ていただいておりますところは、向かって左側が引原川でございます。右がちょうど正面、奥のほうに山をぬっているのが揖保川本川。先ほど地元の方は三方川と呼んでいるという話がありましたが、その揖保川でございます。目の前に見えているこの島、これは中洲でして、流れは向こうの反対側にもあります。2 つに分かれています。川下のほうで合流しています。ここでございますが、見ていただいて分かりますとおり、堤防が自然に近い堤防になっております。この揖保川は、100 年に 1 度の雨を想定した整備計画を今持っておりますが、これも委員会のほうで、今後議論されると思っておりますが、この計画では、この合流地点で 1,100 トンの水が流れるということになっております。ただ、今立っていただいております、この堤防でそれを流下できるかということとはございません。流下できる能力は約 600 トンということになっております。従いまして、500 トンがオーバーフローするということになっております。ここから引原川および揖保川上流に上がっていきますと、そこからは指定区間といひまして、県管理の河川の区間になります。直轄管理区間はそこから下流ということになります。

それから引原川でございますが、上流に多目的ダムの引原ダムがございます。これは県のダムでございますが、農業その他発電も含めた多目的のダムで、洪水調節機能がございます。下流の龍野市の地点で、先ほどの 100 年に 1 度の雨で約 3,900 トンの水が出てくるという計算になっておりますが、この上流の引原ダム等の洪水調節で約 600 トンの洪水流量をカットするということございまして、龍野地点では約 3,300 トンという計画になってございます。バスに戻ってからご説明しますが、それぞれの地点で、今いいました流量が流せるところと流せないところとございます。ここがその中でも流下能力の低いところの代表的なところということになってござい

す。

庄委員 失礼します。たいへん暑いところですので、長い距離を歩いていただきましたので簡単に説明させていただきます。この周辺は、これから先アユ釣りが解禁になりましたら一番漁で賑わうところです。下流正面右側、この堤防の向こうに竹やぶが見えますけれども、この竹やぶで出水時の水を防いでいるという現状です。したがって、住民の方は、「堤防を高くしてほしい、堤防を高くしてほしい」とばかりおっしゃいます。必ずどなたでも「あの堤防は高くしてほしい」ということを言われます。

また時間がありましたら車の中でいろいろお話をさせていただきたいと思います。以上です。

(バス車内での説明：引原川合流点付近)

河川管理者 お手元にあります資料1、ページでいうと5ページでございますが、そこに先ほど降りて見ていただいた合流点の図面がございます。この左上に青い棒グラフに赤い線が入っていますが、この横の目盛りは左のほうが河口のところでございます。河口が0 kmになってありまして、右に行くにしたがって上流にいきます。目盛りは河口からの距離になっております。縦軸は流量になってまして、この青い線が今の堤防で流せる流量ということになっております。この赤い横の棒が、先ほど説明させていただきました計画洪水でございまして、100年に1度の雨が降った時に、これぐらいまで水位が上がるという計算上の流量でございます。先ほどの45キロの地点を見ていただくと分かりますとおり、流下能力が非常に低くなっております。低いというのは青い棒グラフの棒が非常に低いということにして、この赤い線よりも低いということは流下能力が不足しているということでございます。見ていただくと分かりますとおり、主に下流のほうが整備が進みますが、まだまだ上流のほうで能力の不足しているところがあるということでございます。

(バス車内での説明：閨賀橋付近)

森本委員 山崎の森本です。筏を揖保川は流しておったと言いますが、このあたりの閨賀の人たちには筏師さんが非常に多かったようでありまして。今でもその子孫の方がおいでのですが、このあたりから筏が流れていたと思います。今さっき見てもらいました三方川、それから引原川ですけれども、そちらから流れてきまして川が小さいので、ここで組み替えて少し大きな筏にして、長い筏にして流していたようでございます。ここから下流は、堰堤がたくさんありますけれども、冬の間は堰堤を開けていなければなりません。堰堤を閉めるのは、「中」、6月の20日過ぎの「中」です。夏至のことです。冬至を1年の始めとしますと、1年の真ん中が夏至ですので、夏至のことを「中」と言いますが、「中」になりますと筏道を閉じて田んぼに水を引きます。「中」から彼岸までは、その権利がありますので、彼岸までは筏道をふさいでおります。高瀬舟も同じであります。秋の彼岸が来ますと、田んぼの水がいらなくなりますので、筏の道を開けるというようなことをしまして筏が通っておったわけですが、最近で

は非常に早稲を作り出しまして、5月の連休の時分から田植えを始めております。これは台風などが来るまでにということで早作りをしているんだと思います。筏の話を見せてもらいました。以上です。

(バス車内での説明：染河内川合流点付近)

庄委員 失礼します。少しだけ補足させていただきます。毎年河川で水生生物の調査をしております。そうしましたら、トビゲラ・カワゲラ・カゲロウ・ヘビトンボ、など、きれいな川に住む生物がほとんどです。ただカゲロウは上流域にいないカゲロウがおります。上流域というのは、染河内川の上流、三方川、引原川にはカゲロウは限られますけれども、^{かんべ}神戸まで、この合流点まで出てきますと、少し汚れた川に住むカゲロウが見られます。毎年、水生生物調査をしておりますが、年々川がきれいになっております。以前あまりいなかったヘビトンボがずいぶん増えてきたという感想を持っております。以上です。

(バス車内での説明：清姫橋付近)

森本委員 このあたりは、私が昭和49年頃に^{かんべ}神戸の小学校に通っておったんですが、その時と少しも変わっておりません。今の時期になりますと、アユがよく飛び上がるのを見ます。この向こうのところは清野と言います。清野には発電所がありますが、清野は種子を作っております。もちの種です。兵庫県で作る米のもちの種のほとんどのものをここで作っているのではないかと思います。このあたりを神河地区と言いますが、昔からよい米がとれましたので、県営の種子の圃場が清野と河東地区で行われております。最近は麦を作っている田んぼはあんまりないのですが、麦の種子もシロガネコムギを作っております。兵庫県内のシロガネコムギの種子のパーセントをいいますと、大体40%までは神河の種子圃場で作っております。それから米のほうでいいますと、大体20%ぐらいの種子を作っています。揖保川の中流域は昔からよい米ができることで有名なところであります。